

B型肝炎 予防接種

B型肝炎は血液や体液を介して人から人に伝染します。もしかかると急性肝炎になったり、慢性化していくれ肝硬変や肝臓がんになっていくこともあります。

また乳幼児はキャリアになりやすく、成人してから発症します。

平成28年10月から、乳児（1歳未満）へのワクチン接種は定期接種の対象です。



予防接種の注意・お願い

予防接種を安心して受けるために、いくつかのことを心がけてください。

○受ける予防接種について、病気のことやワクチンの効果・副反応などについて、あらかじめ知っていてほしいと思います。市町村からの文書や、育児書（雑誌）なども参考にしてください。分からぬことなどがありましたら、会場の職員や医師にたずねてください。

○健康状態の良い時に受けましょう。心配なときは無理せずに延期したり、医師に相談してください。

○前日は入浴して、体を清潔に。

○予診票は、良く読んで、きちんと記入しましょう。

○母子手帳も忘れずに。（個別接種では、念のために保険証も）

○接種の会場で、体温を測り、記入します。

○予期できない重篤な副反応が、注射のあと15～30分以内におきることがあります。すぐに帰らず、しばらく会場で様子を見てください。

○接種の当日は、入浴をふくめていつもと同じ生活でいいのですが、激しい運動はさけてください。



B型肝炎はB型肝炎ウイルスによっておきる感染症です。もしかすると通常は急性肝炎をおこし、体のだるさ、疲れやすさ、黄疸（おうだん）などの症状がでます。数か月で治癒しますが、ときには慢性化し（持続感染、キャリア化）、長い年月のち次第に肝硬変になったり、肝臓がんになってしまいますこともあります。また命に関わる重症な状態（劇症肝炎）になることもあります。

乳幼児が感染すると、ウイルスが排除されずに「キャリア」になりやすく、その影響は一生続きます。

血液や体液を介して伝染する感染症ですが、ワクチン接種によって予防することができます。B型肝炎ワクチンは将来のがんの発生を予防するワクチンだといえます。

日本ではこれまで主に、キャリアの母親から生まれる赤ちゃんを守るために予防接種を行っていました（「母子感染予防対策」、健康保険の適応）。この方法は十分に成果があり、母子感染でキャリアになる赤ちゃんはぐんと減りました。

しかしB型肝炎は伝染力が強く、いつ、どこで感染を受けるか分かりません。そのため、すべての子どもたちに定期接種としてワクチン接種を行う必要があります（ユニバーサル・ワクチン）。平成28年10月から定期接種の対象とされたのはそのためです。

生後まもない時期の接種が望ましいために、定期接種は生後1歳未満が対象年齢です（標準では生後2か月、3か月、7～8か月の3回）。

それ以上の子どもや大人であっても予防接種を受ける意味は十分にありますので、任意接種にはなりますが、ぜひ受けるようお勧めします。

予防接種を受けたとの注意

※予防接種の副作用として、ごくまれに、注射の直後に急に具合の悪くなることもあります（アナフィラキシー・ショック）。万一のために15分程度は医院の中にいていただき、その後もしばらくは医院にすぐひきかえせるようにしてください。（その場で適切な処置をすれば、最悪の事態はさけられます。）

B型肝炎のワクチンは不活化してあるワクチンです。

ほかの予防接種は、1週間以上（※）たってから受けてください。

※接種の翌日から次の接種日の前日まで6日以上

B型肝炎の予防接種

【予防接種法による定期接種】

- 1歳未満（平成28年4月1日生まれ以降）

- 3回の接種

1回目から27日（4週間）以上あけて2回目接種

1回目から139日（20週間）以上あけて3回目接種

（標準は生後2か月、3か月、7～8か月）

- 皮下注射（各0.25ml）

【健康保険適応】

- B型肝炎キャリア（HBs抗原陽性）の母から生まれた乳児
- 3回の接種（生直後、1、6か月）
- 皮下注射（各0.25ml）

【任意接種】

- 全ての年齢
- 3回の接種（4週間隔で2回、20～24週間後に1回）
- 10歳未満は各0.25mlを皮下注射、10歳以上は各0.5mlを皮下注射または筋肉内注射

B型肝炎のワクチン

①注射したところは軽くもんで下さい。

②丸一日は激しい運動は避け、普通の生活をしていて下さい（**入浴はかまいません**）。

③接種したあと、当日や翌日などに熱をだすことがときになりますが、ほとんどのままでおさまります。

④注射したところが、赤くなったり、はれたりすることがありますが、そのままで数日でおさまります。